

高まる高学歴女性の不安の要因分析

Analysis of the factors of anxiety growing in highly educated women

盧 回 男

Hoinam NHO

(日本女子大学学術研究員)

要 約

『国民生活に関する世論調査』(内閣府, 2017)によると、「悩みや不安を感じている」と答えた者は63.1%で、3人の2人は悩みや不安を感じていた。不安を感じている割合は、近年になるほど高まっており、日本が安心社会から不安社会へと大きく転換したことがわかる。また、2011年に実施された日本女子大学現代女性キャリア研究所の「女性とキャリアに関する調査」(Riwac調査)の自由記述では、8割以上の高学歴女性が不安をもっていることがわかった。本論文では、Riwac調査の5155人の自由記述をもとに高学歴女性の不安の詳細を分析し、考察する。用いる分析方法はKH Coderによる内容分析で、この分析によって不安の内容を明らかにするとともに、デモグラフィック特性と心理的特性(不安)、そして「社会的要因」、「個人的要因」とがどのように関連して不安をもたらしめているのかを考察し、不安の高まっている理由についても考察する。

[Abstract]

According to the “Public Opinion Survey on People’s Lives” conducted by the Cabinet Office in 2017, about two-thirds of the participants (63.1%) experienced troubles and uneasiness. The proportion of individuals who experience anxiety has been increasing at an alarming rate in recent years, indicating that Japan has made a major shift from a safe society to an anxious one. Additionally, in the free description section of the “Survey on Women and Career” (the Riwac survey) conducted by the Japan Women’s University Research Institute for Women and Careers in 2011, more than 80% of highly educated women reported experiencing anxiety. In the present study, we analyzed the details of the anxiety reported by 5155 highly educated women in the free description section of the Riwac survey, using the content analysis method suggested by KH Coder. In order to understand why the incidence of anxiety is rising, this paper clarifies the contents of anxiety; explores whether demographic and psychological characteristics (anxiety), social factors, and personal factors are related to each other; and whether these variables cause anxiety.

問題

かつて日本は安心社会を形成することで経済発展を遂げた。しかし、今不安社会に転落している。現代女性キャリア研究所が2011年に実施した調査では8割を超える高学歴女性が不安を抱えていることがわかった。

毎年行われている『国民生活に関する世論調査』(内閣府, 2017)によると、日頃の生活の中で、

悩みや不安を感じているか聞いたところ、「悩みや不安を感じている」と答えた者は63.1%であった。この割合は前年の65.7%よりは低下したものの、1992年以降は「悩みや不安を感じている」が「悩みや不安を感じていない」を上回り、年々増加している。悩みや不安が最も高かった年は2007年の69.5%、2008年の70.8%、2012年の69.1%である。日本女子大学現代女性キャリア研究所の「女性とキャリアに関する調査」（以下、Riwac調査とする）の実施は、2011年11月で、対象者は首都圏在住の女性であった。この調査の前後にあたる2011年6月および2012年6月に実施された『国民生活に関する世論調査』を見ると、不安を持つ女性の割合はそれぞれ69.0%と70.5%であり、男性の64.9%と67.6%より高い。

このように女性の不安が年々高まっていることはよく知られているが、どのような不安を抱えているのか、その理由は何かなど、その内訳についての詳細な分析はない。

先行研究と目的

不安

心理学で不安は、次のように定義されている。

自己の将来に起こりそうな危険や苦痛の可能性を感じて生じる不快な情報現象をいう。恐怖には特定の対象があり、それに立ち向かうこともできれば回避もできるが、不安は漠然として、はっきりした対象がなく浮遊しているため、これに対しては不明確な危機感・無力感などが生じる。また、不安には浮遊しているという特性があるため、未来への不信、立場の喪失の感じになることもある。（『新版心理学事典』、1981、p.740）

また、社会学では、「不安は人間にとって普遍的な避けることのできない心理現象であり、外的な出来事や内的な観念、情動などに反応して起こる」（『社会学事典』、1988、p.752）とされる。何らかの不安を持っている人は多くみられるが、不安を引き起こす要因は様々であろう。その要因は大きく、「社会的要因」と「個人的要因」の二つに分けて考えることができる。前者は経済事情や就労条件、社会状況の変化などから生じ、社会によって規定される。後者はライフイベント、家庭環境、性格などから生じると考えられる¹。その理由は以下のとおりである。

一般的に、年齢が高くなるにつれ、不安も高まる²。しかし、Riwac調査からは就職氷河期世代の方が就職河期前世代より不安の割合が高いことが明らかにされており、むしろ若い世代の方が年齢の高い世代より不安が高いことを物語っている。不安の高まりが、個人の加齢による変化だけでは説明できないのである。日本が1990年代を境に安心社会から不安社会に移行しているのではないかと考えられる。その理由は、下記で見ると多くの不安が仕事³に関するものであり、雇用が不安定で経済的に困難を抱えている女性ほど不安を記述する割合が高いからである。

今までは不安を心理的なものであると考え、「個人的要因」に注目する傾向があったが、上記より、不安を生じさせる要因として「個人的要因」だけでなく「社会的要因」にも着目する必要があると考えられる。以下では、「社会的要因」として、女性の高学歴化が進んだ90年代以降の主要な社会経済的問題である就職氷河期および非正規雇用に関する研究を取り上げる。

就職氷河期

日本経済は、バブル崩壊後「失われた10年」と呼ばれる経済停滞期を経て、再びリーマンショックなどの影響でさらに後退した。このような経済状況の影響から、就職氷河期⁴が現れた。

大槻（2016）は、就職氷河期を1976~82年生まれ（2011年調査時、29~34歳）とした。この就職氷河期世代は①小学生の時、バブル経済（1987~1990）を、②中学生の時、バブル崩壊（1991）を、③超氷河期に就活、高校や大学を卒業し、④社会に出てから失われた10年、20年を、⑤2000年代半ば、リーマンショック（2008年リーマン・ブラザーズ破綻）を経験した。また、仲田（2012, 2013）⁵は、Riwac調査から大学卒業者のみを抽出し、大卒女性の就業率が80%を割った1993年に大学を卒業した41歳を基準に、30~41歳までのグループと42~49歳のグループに分けた。小学校時代にバブル景気を過ごし、不況のなかで就職活動を行なって（1977年から1981年に出生）、短大卒であれば1998年から2002年、大卒であれば2000年から2004年に卒業したと推測される人びとを氷河期世代とした。また、バブル景気の頃に就職活動を行なった人びとや、男女雇用機会均等法施行直後に社会に出た人びとが含まれる（1962年から1966年に出生）、1983年から1987年に短大を、1985年から1989年に大学を卒業したとされる世代を「氷河期前世代」とした。

非正規問題

このような「社会的要因」による困難に陥った時期に学生から社会人への移行期を経験した人、特に女性は、本人の希望に沿ったライフデザインが描けた人は多くない。就職氷河期問題と共に現れる問題として非正規問題がある。

Riwac調査（2011）分析からみると、学校を卒業した時に非正規雇用で社会人になった人は5155人中981人であり、そのうち50.1%が現在（2011年当時）も非正規のままであった。

2017年の労働力調査の結果からみると、非正規雇用労働者は平成6年から現在まで増加し続けている（2017年、役員を除く雇用者全体の37.2%）。女性の場合非正規雇用労働者の割合は55.5%と男性21.8%に比べて多い。非正規雇用者が非正規の職に就いた理由として「自分の都合のよい時間に働きたいから」を挙げる本意型もいるが、「正規の職員・従業員の仕事がないから」を挙げる不本意型の非正規雇用労働者（男性23.3%、女性10.3%）も多い。このように時代の「社会的要因」などにより希望に反した選択を余儀なくされた人はそうでない人より人生への不安要素をより多く持っていると考えられる。

不安が年々高まっている中、非正規雇用者の増加も一つの要因になっている。また、非正規雇用者の増加によって正規雇用者の不安も高くなっている。雇用保障が万全でない社会になっているからであろう。それに伴い、夫を取り巻く労働環境の悪化を実感している既婚女性の不安も高まる。つまり、労働市場の構造が不安に影響する。

内容分析⁶

一般的に質問紙調査の中には自由記述の設問を設けることが多い。しかし、多くの回答は十分に分析されているとはいいがたい。それには分析の難しさはさることながら、分析に至るまでの精査の過程の大変さが課題になる。樋口（2004）も、現在、新聞記事をはじめとする各種データ

ベースの整備やインターネット調査の方法論開発などによって、これらテキスト型データの収集こそ容易になりつつあるものの、その分析については未だ決して容易とは言い難いと述べている。その理由として、テキスト型データのような質的データを計量的に分析するためには、統計処理が可能となるように何らかの形でデータをコード化せねばならない点が、まず問題になるからだ。例えば、自由回答項目にどんな回答がいくつ記述されたのかを調べるためには、何らかの基準にそって回答を分類するというコーディング作業が必要になると指摘している。

目的

Riwac 調査 (2011) により、女性のキャリアの軌跡は多様であり、そのため、キャリア支援においてはM字の底上げ以外にも重要なポイントがあることが明らかになった。しかし、まだまだ分析に残された課題は多い。今回はその中でも設問の最後に設けられた自由記述「これからの職業生活や家庭生活における希望や不安について、思っていることをなんでも自由にお書きください」を中心に分析を試みる。

本稿では、不安について語られた記述が圧倒的に多かったため、特にその要因をさぐり、要因間の関連を明らかにすることを目的とする。

このような膨大な生の質的データから何が見えてくるかについて内容分析 (テキスト分析) を行なう。そしてこれらの結果を量的データとして分析検討する。

高学歴女性の不安に影響していると考えられる社会要因として雇用形態を説明変数として用い、就職氷河期世代とその前世代を対象に分析を行なう。その際、不安が、パブリック (「社会的要因」) とプライベート (「個人的要因」) でどのように関連するかを検討する。このような高学歴女性の不安要素を詳細に検討し、どのような要因 (「社会的要因」と「個人的要因」) が不安に影響を与えるのかを確認する。

方法

調査対象者⁷

Riwac 調査の対象者は、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県に在住する 25 歳から 49 歳までの高学歴女性 (短期大学、高等専門学校以上の教育を受けた) 5155 人 (平均年齢 $X=37.13$, $SD=6.64$) であった。

調査期間と実施方法

2011 年 11 月 25 ~ 27 日。(株)マクロミル登録モニターへのインターネットを利用したアンケート調査であった。

用いた自由記述質問項目

Riwac 調査では、全 83 問中、「これからの職業生活や家庭生活における希望や不安について、思っていることをなんでも自由にお書きください」という自由記述形式の質問を 1 問、質問票の末尾に設け、5155 人の回答を得た。その中には意味の確認ができない回答 (不明) が 7 人いた。

今回は7人を除いた5148人を分析対象者として分析した。

分析方法

自由記述の分析にはテキスト型データを統計的に分析するためのフリー・ソフトウェアであるKH Coder (樋口, 2014) を用いた⁸。今回用いるデータ5155人分の膨大な自由記述から有用な情報を掘り出し、定型化するために適切な方法である。

また、デモグラフィック特性と不安との関係をみるためにはSPSS23を用いた。

結果

問い「これからの職業生活や家庭生活における希望や不安について、思っていることをなんでも自由にお書きください」に対し、希望と考えられる記述より不満や不安に関する記述内容があるかに多かった。また、この設問は無記入を認めず、すべての対象者は何らかの回答をしなければならないため、「特になし」「わからない」との回答が多々あった。

まず、分析の前に、誤字を正しく修正し、ひらがなやカタカナの表記を漢字の表記に統一した後、データクリーニングを行なった。

また、分析の際、意味のないワード検出の重複を避けるために強制抽出する語を指定するForce pick up ワードと使用しない語を指定するForce ignore ワードを決めた。さらに、自由記述の中には、動詞、形容詞が含まれており、重要な役割をしていると考えられるが、本論文では何がという「不安」に対して目的を明確にすることを課題としているため、形容詞は使用しない語に指定し、Force ignore ワードにした。このような作業により、より意味のあるワードは残し、カウントも容易になったため、明確な分析が可能となった。

その際に不満や不安に関する記述を行っていつかどうかの判定、および、統一ワードへのデータクリーニング作業に関しては3人の評定者が評定し、議論を必要とするワードについては他の質問項目を参考に決定した。

さらに、単語の抽出に関しては、全体の反応に対して、文章の中で単語が出現した個数を集計する方法と文章の中で単語が出現したか否かを集計する方法がある(斎藤, 2012)。今回は前者の一つの文章である単語が複数回出現した場合、それぞれを出現回数としてカウントする方法を選択した。

その結果、自由記述の回答から不満や不安な要素について記述した調査対象者(下記、不安要素とする)は4195人(81.5%)、その他(特になし(615人)、わからない(36人)、希望と考えられる(302人))は953人と18.5%であった。

この結果は、『国民生活に関する世論調査』(内閣府, 2011, 2012)⁹の悩みや不安を聞く問いでの「悩みや不安を感じている」と答えた69.0%(女性のみ, 2011年6月実施)と70.5%(女性のみ, 2012年6月実施)より高い。しかし、これまでに不安の内容を詳細に分析した調査は少ない。今回はRiwac調査対象者5155人の中、不安要素を持っている4194人を中心に分析、考察した。

各条件別にデモグラフィック分析

不安について、各条件別にデモグラフィック分析をした。

Riwac 調査 (2011) では、5155 人中 4195 人の 81.5% が不安を感じていた。

まず、キャリアパターン別¹⁰、世代区分別¹¹に不安の割合を見た。

V 就業経験なし (70.5%) 以外の I 初職継続型、II 転職型、III 再就職型、IV 離職型すべてにおいて 8 割を上回る結果であった。また、氷河期世代と氷河期前世代でみると、全体的に氷河期世代で不安要素が高い割合であった (Table1)。さらに、年代別にみると 30~34 歳で 83.1% と不安要素を有する割合が最も高かった。

Table1 キャリアパターン別、世代区分別不安の割合

	不安要素を有する (n=4195)		
	全体	氷河期世代	氷河期前世代
I 初職継続型 (n=761)	611 (80.4)	185 (84.1)	73 (81.1)
II 転職型 (n=1524)	1237 (81.3)	372 (82.7)	206 (80.2)
III 再就職型 (n=1206)	976 (81.1)	149 (84.2)	306 (80.5)
IV 離職型 (n=1603)	1328 (82.9)	347 (83.6)	241 (81.7)
V 就業経験なし (n=61)	43 (70.5)	15 (75.0)	4 (66.7)
全体 (N=5148)	4195 (81.5)	1068 (83.3)	830 (80.7)

($\chi^2=908.474$, $df=4$, $p<.001$)

未既婚と現在の状況からみると、継続就業の I 初職継続型と II 転職型以外は未婚の女性が全て不安要素の割合が高く、中でも現在就業していない IV 離職型の未婚の不安が 87.1% と最も高い ($\chi^2=908.474$, $df=4$, $p<.001$)。

就業形態別にみると、無業の人の不安要素の割合が 82.5% と最も高く、正規 (81.6%) と非正規の職員・従業員 (81.3%) の場合は差がなかった。さらに、未既婚別にみると、未婚の女性の場合に、非正規の職員・従業員と無業で不安の割合が既婚の女性より高い ($\chi^2=864.109$, $df=3$, $p<.001$)。近年、未婚のシングル女性の貧困問題がクローズアップされてきており (小杉・鈴木・野依, 2017)、この結果も、それを反映したものになっている。特に、日本の社会政策は、女性は若い時は父親に、結婚してからは夫に養われることを暗黙の前提に作られている。未婚率が上昇する中で、未婚の無業や非正規の女性が抱える不安を丁寧にあぶり出し、その不安を和らげることが必要になっている (Table2)。

Table2 不安における未既婚別雇用形態

	既婚 (n=3315)	未婚 (n=1833)
自営業・内職者・家族従業者・役員	116 (76.3)	72 (74.2)
正規の職員・従業員	509 (82.0)	816 (81.4)
非正規の職員・従業員	808 (80.6)	503 (82.5)
無業	1267 (82.3)	104 (84.6)

($\chi^2=864.109$, $df=3$, $p<.001$)

Table3 不安と生活のゆとりについて（未既婚別）

	ゆとりがある	ゆとりはあるが、将来的な不安はある	ゆとりはないが、今すぐ生活に困るようなことはない	家計が厳しい状態である
【未婚】	122 (6.6)	465 (25.3)	904 (49.2)	300 (16.3)
不安	80 (65.6)	385 (83.0)	753 (83.4)	257 (85.7)
【既婚】	210 (6.3)	975 (29.4)	1665 (50.2)	438 (13.2)
不安	126 (60.0)	780 (80.0)	1390 (83.5)	385 (88.1)

($\chi^2=152.565$, $df=9$, $p<.001$)

Table3は生活の経済的ゆとりについて¹²の未既婚別、不安の割合である。既婚者全体における「ゆとりがある」と答えた人は210人(6.3%)で、「ゆとりはあるが将来的に不安はある」と答えた人は975人(29.4%)、「ゆとりはないが、今すぐ生活に困るようなことはない」と答えた人は1665人(50.2%)、「家計が厳しい状態である」と答えた人は438人(13.2%)であった。また、未婚者全体における「ゆとりがある」と答えた人は122人(6.6%)で、「ゆとりはあるが将来的に不安はある」と答えた人は465人(25.3%)、「ゆとりはないが、今すぐ生活に困るようなことはない」と答えた人は904人(49.2%)、「家計が厳しい状態である」と答えた人は300人(16.3%)であった。全体的に、「ゆとりがある」家計が少ないことが分かる。この結果をさらに、不安との関係からみると生活のゆとりがあるほど不安要素の割合が低く、家計が厳しいほど不安要素の割合が高いことから、経済的要因が不安要素を高める重要な要因になっていることが分かる。さらに、未既婚別にみるとその割合の差の表れ方が異なっていた。既婚女性中、「ゆとりがある」(60.0%)と答えた不安の少ないグループと「家計が厳しい状態である」(88.1%)と答えた不安の大きいグループの不安の割合の差が未婚女性に比べて大きい。つまり、既婚女性が経済的に二極化していることが分かる。

そこで、既婚女性の「ゆとりがある」グループと「家計が厳しい状態である」グループの家計の主たる担い手の年収をみた(Figure1)。

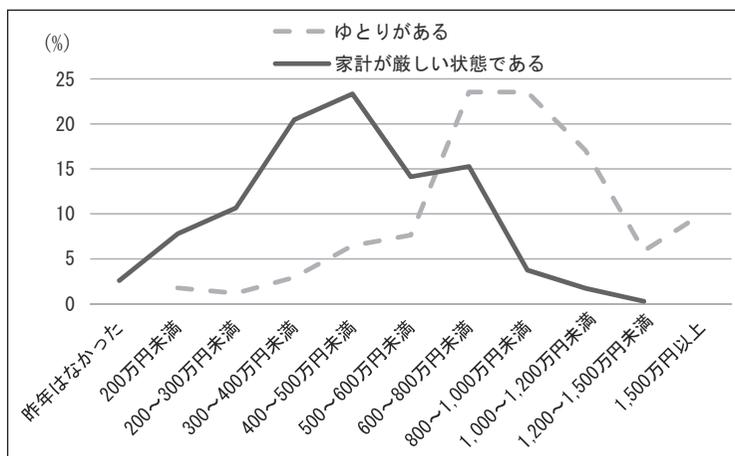


Figure1 既婚女性に対する「ゆとりがある」グループと「家計が厳しい状態である」グループの家計の主たる担い手の年収

「家計が厳しい状態である」グループの年収のピークは400～500万円であり、「ゆとりがある」のグループは800～1200万円をピークに右に偏っている。不安についての割合と同様に家計の主たる担い手の年収も二極化していることが分かる。

将来展望の面¹³でも、心理的不安が見てとれる結果であった。経済的要因と同様に将来的不安が現在の不安要素に関係することが分かる。全体的に将来展望が厳しいほど不安要素の割合が高くなる。さらに、既婚女性より未婚女性の方が「経済的に厳しくなる」と感じている ($\chi^2=100.434$, $df=4$, $p<.001$)。また、氷河期世代の将来展望の厳しさにおける不安の割合は全体的に氷河期前世代より大きい ($\chi^2=52.626$, $df=4$, $p<.001$)。

Table4 将来展望と不安の関係

	今よりもっと豊かな生活 ができる	現在の生活レベルは維持 できる	経済的に厳しくなる	将来展望が見えない
既婚	441 (77.2)	1081 (77.3)	817 (87.2)	348 (88.3)
未婚	259 (73.4)	488 (77.3)	371 (89.6)	370 (86.7)
氷河期世代	223 (76.9)	433 (81.1)	244 (89.7)	164 (90.1)
氷河期前世代	110 (74.8)	248 (72.3)	297 (87.1)	168 (88.9)
自営業・内職者・家族従業者・役員	29 (59.2)	59 (68.6)	56 (90.3)	41 (83.7)
正規の職員・従業員	230 (75.4)	516 (77.6)	347 (90.1)	225 (86.2)
非正規の職員・従業員	228 (78.1)	448 (76.3)	366 (84.9)	266 (88.7)
無業	213 (76.6)	546 (79.0)	419 (88.6)	186 (88.2)
全体	700 (75.8)	1569 (77.3)	1188 (87.9)	718 (87.5)

($\chi^2=100.434$, $df=4$, $p<.001$)

さらに、雇用形態別に見ると「経済的に厳しくなる」の場合に正規の職員・従業員の不安の割合が高いが、「将来展望が見えない」の場合に非正規の職員・従業員と無業の不安の割合が高い。

氷河期世代の不安が高まり、正規であっても非正規であっても、これまで議論されることの少なかった無業であってもその中身が異なるだけで、経済的に厳しいと感じ、将来的不安が高い。

その将来展望に影響を与える要因を特定化するため、まず、将来展望を従属変数とし、1の「今よりもっと豊かな生活ができる」から4の「将来展望が見えない」までの4段階を順序尺度と考え、全体(5132人)と既婚女性(3033人)に対する重回帰分析を行なった。

独立変数には、ライフサイクルで見ると、年齢が高くなるほど不安が高まるので、本人の年齢を、また、経済要因としては、世帯の家計状況、本人の仕事や経済状況、デモグラフィック要因についての変数を挿入した。

その結果、全体では、予想通り年齢が高くなるほど、また現在の家庭の経済状況が厳しいほど、将来展望が見えないことがわかった。仕事に関しては、現職についての雇用の安定性と職場の人間関係・コミュニケーションに不満であるほど、さらに子どもがいないと将来展望に不安が大きいの。既婚女性の場合も同様に、年齢が高くなるほど、現在の家庭の経済状況が厳しい場合、現職についての給与と仕事内容・やりがい、職場の人間関係・コミュニケーションに不満である場合、子どもがいなかった場合、世帯年収が低い場合に将来展望に不安が大きいのことがわかった (Table5)。

重回帰分析によって、子どもがいなかった方が将来不安に繋がるということがわかったが、不安と子どもの人数との関係を見ると、子どもが1人の場合に最も不安要素の割合が高かった。ここから、第1子を産んだ後の不安が最も高いことがわかった (Table6)。

Table5 将来展望に影響を与える要因(重回帰分析)

独立変数	全体		既婚	
	β	p	β	p
AGEID 年齢	.13	****	.17	****
現在のご家庭の経済状態	.18	****	.21	****
現職への満足度(給与)	-.03		-.07	**
現職への満足度(労働時間・休日)	.03		.00	
現職への満足度(配置・昇進・処遇)	-.01		-.01	
現職への満足度(評価システム)	.01		.02	
現職への満足度(雇用の安定性)	.06	**	.01	
現職への満足度(仕事と家庭の両立のための支援制度)	.02		.03	
現職への満足度(自宅と職場の距離)	-.03		-.03	
現職への満足度(仕事の内容・やりがい)	.04		.06	*
現職への満足度(職場の人間関係・コミュニケーション)	.06	**	.05	*
子どもの有無	-.14	****	-.13	****
雇用形態	.01		.01	
資格の有無	-.02		.00	
家計の主たる担い手の年収	-.02		-.05	*
調整済みR ²	.09		.08	

**** $p < .001$, *** $p < .01$, ** $p < .05$, * $p < .10$

Table6 子どもの人数における不安

	1人	2人	3人	いない
不安	873 (83.1)	832 (80.7)	164 (81.6)	2326 (81.2)
その他	178 (16.9)	199 (19.3)	37 (18.4)	539 (18.8)
全体	1051	1031	186	2865

抽出語に対する出現回数

これまで見てきた不安の詳細を検討するため、KH Coderを用い、内容分析を行なった。

まず、ワードの頻度の集計を行なった。不安要素を有する4195人に対する抽出語の出現回数を全体と正規・非正規・無業別に分け、サブカテゴリ5%で整理した¹³。

全体(All)及び正規と非正規、無業別の抽出語に対する出現回数を上位5位までみると、すべてにおいて第1位が「仕事」であったのに対し、無業では「子ども」が第1位であった。それに比べ、正規のみ「子ども」が第5位であった。ここには正規のグループには未婚の女性が多く含まれており、その影響によるものであると考えられる。そこで、正規の既婚女性のみを分析を試みた。結果、第1位は「仕事」であり、出現回数7回差で第2位に「子ども」があった。正規の女性で子どもの出現頻度が少なかったことは未婚女性の割合が他のグループより多かったことの影響も考えられる。また、非正規では、「正規」が3位と他に比べて上位であった。現在の雇用形態に不安が大きいことが反映されていると考えられる。無業では、「自分自身」が4位と上位であった。さらに、「パートナー」については無業が7位と上位であったのに対し、非正規は

14位, 正規は20位であった。無業グループは、「社会的要因」より「個人的要因」からの不安が大きいグループであった。

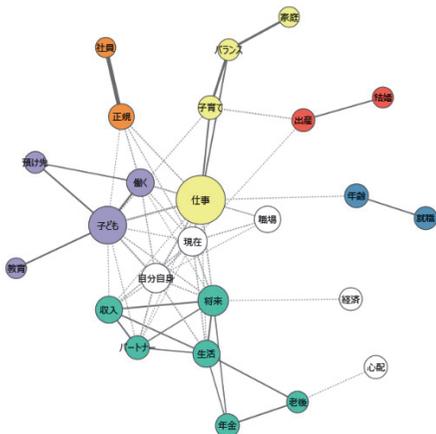
さらに、抽出語に対する出現回数を、世代区分の氷河期世代・氷河期前世代における雇用形態別に上位5位までみた¹⁴。不安要素を有する全体 (n=4195) における氷河期世代 All (n=1068)、氷河期前世代 All (n=830) で同じく「仕事」、「子ども」、「将来」、「自分自身」、「現在」が抽出された。しかし、氷河期世代では正規と非正規では「自分自身」が、無業では「将来」と「現在」が、氷河期前世代の正規では「自分自身」と「子ども」が非正規では「自分自身」が、無業では「現在」が上位5位に入らなかった。また、「パートナー」に関しては氷河期世代も氷河期前世代も正規と非正規に比べ無業の方で上位に位置している。

抽出語に対する共起ネットワーク

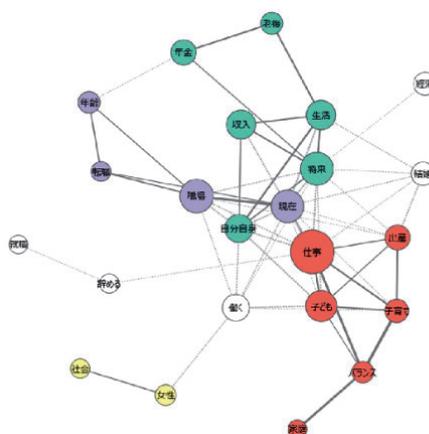
次は抽出語同士の関係性をみるため、共起ネットワーク図で表してみた (Figure2-1)。

「子ども」が中心になっている無業以外の All と正規, 非正規において「仕事」が共起ネットワークの中心になっていた。

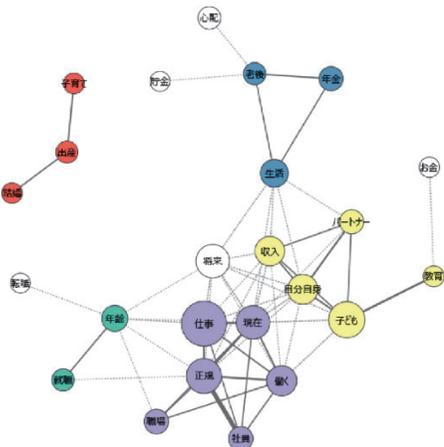
All(n=4194)



正規 (n=1325)



非正規 (n=1311)



無業 (n=1371)

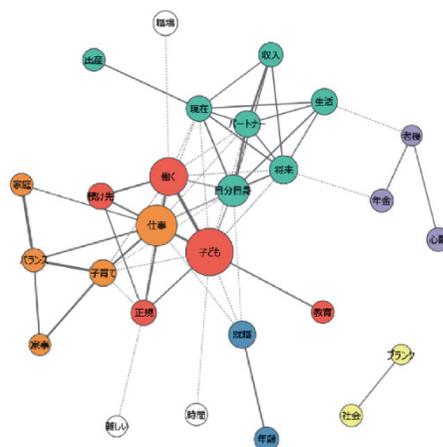
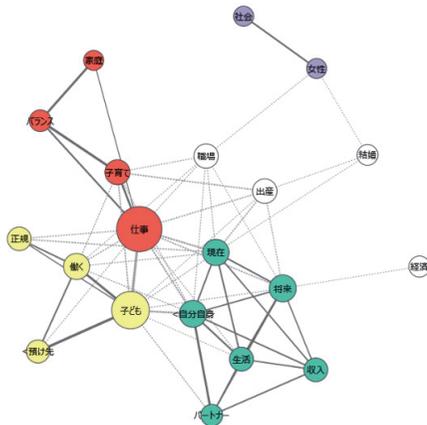


Figure2-1 抽出語を中心に共起ネットワーク図 (全体、正規、非正規、無業)

氷河期世代 (n=1282)



氷河期前世代 (n=1028)

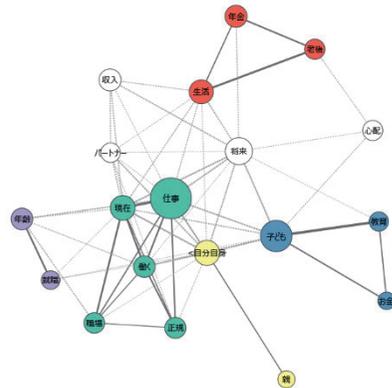


Figure2-2 抽出語を中心に共起ネットワーク図（氷河期世代、氷河期前世代）

また、正規では「仕事」と「子ども」、「子育て」、「家庭」が同じグループであったが、非正規と無業では仕事領域と家庭領域は分かれていて、「子ども」は「自分自身」と結びついていた。さらに、非正規では「子育て」、「出産」、「結婚」が、無業では「社会」、「ブランク」がネットワークから孤立している。

さらに、世代区分で見ると、氷河期世代、氷河期前世代ともに、「仕事」が共起ネットワークの中心になっていたが、大きな円の「仕事」と結びついている不安要素は異なっている (Figure2-2)。

氷河期世代では「仕事」と「子育て」、「バランス」、「家庭」が、また、「子ども」と「預け先」、「働く」、「正規」が強く結ばれていた。半面、氷河期前世代では、「仕事」と「現在」、「働く」、「正規」、「職場」が、「子ども」と「教育」、「お金」が強く結ばれていた。また、氷河期世代では現れていない「老後」、「年金」、「生活」のネットワークが見られた。さらに、氷河期世代では「自分自身」が「現在」と「将来」、「パートナー」、などと結ばれているが、氷河期前世代では「自分自身」が親と強く結ばれていた。「仕事」に不安を感じていることは同様であってもその内訳は異なっており、不安の多様化を確認することができた。

考察

不安は誰もが抱いているものであるが、自分の抱く不安の解釈も大小もそれぞれ異なるであろう。「不安を体験している自分を支え、自分の内面を理解してくれる周囲の人がいることは心強いことである」(『こころの問題事典』2006, p.67) というように、多様な状況の多様な不安内容を紹介し、理解することで、同様な状況で同様な不安内容を持っている女性の支えとなりうるだろう。

不安を引き起こす様々な要因のなか、社会状況の変化、経済の不安定など「社会的要因」から生じる不安とライフイベント、家庭環境、性格など「個人的要因」から生じる不安を検討するた

め、本稿では、就職氷河期を基準とした世代区分と、雇用形態により分析を行なった。さらに、「個人的要因」である個人のライフイベントなどを中心に分析することで、就職氷河期を基準とした世代区分と、雇用形態による不安の違いについて比較した。

まず、①就職氷河期世代の29-34歳(2011年調査時)の高学歴女性の不安要素を有する割合は、高まっている。就職氷河期世代は、初職を安定した正規雇用でスタートすることが難しかった世代である。初職が正規雇用以外であることはその後の人生に不利な影響を及ぼすと稲垣・小塩(2013)が明らかにしている点からみても、正規雇用でないことから起こる不安は大きいと考えられる。また、②現在無業である離職型未婚女性の不安の割合は最も高く(87.1%)、非正規未婚女性の不安の割合も既婚女性より高い。江原(2015)は、これまでは未婚女性の非正規労働者が増えても、働いていても生活ができない女性が増えているにもかかわらず社会問題に値しない、女性の貧困が見えなかったと指摘している。それは従来のジェンダー観・性別役割観によることであり、「女性労働の家族依存モデル」(山田2015)が根強いせいであるという。つまり、社会政策が女性は結婚して夫に養われることを前提に作られていることの影響であると考えられる。また、前田(2017)は地方の高学歴未婚の無業女性の問題を指摘しているが、本調査では首都圏の高学歴未婚の無業女性にも不安が高まっていることが確認された。③また、家庭の経済的要因が不安の重要な要因であり、将来展望とも大きく関わる。「生活のゆとりがある」から「家計が厳しい」までの割合と不安の割合は比例する。収入が安定していないと全体的生活に様々な不安がのし掛かってくる。将来展望に関しても同様である。また、経済状況に関しては既婚女性の場合により著しい。つまり、④高学歴既婚女性の経済的・心理的状況が二極化していて、その不安要素を有する割合も高まっていることが明らかになった。専業主婦世帯の貧困についての研究では周(2015)がある。ここでも収入の二極化を明らかにしている。また、⑤職場での仕事のやりがいや人間関係・コミュニケーションが将来展望に影響を与え、不安要素を有する割合に関係していた。さらに、子どもと不安との関係を見ると、子どもが1人の場合に最も不安要素の割合が高かったが、子どもが増えることで不安が増えることではない。つまり、⑥子ども1人と不安の高まりから第1子を産んだ後の不安が最も高いことが分かった。これは、子どもを産むことで生じる経済的不安や将来的不安のせいであろう。社会環境が少子化社会に影響を与えていると考えられる。また、人間は役割が増えるほど不安要素が増えるとは言えないことが分かった。仕事人として、配偶者として、あるいは親としての役割が増えるほど、不安要素が増えるとは言えない。

内容分析からは、⑦雇用形態別に分けるとその不安の中身が異なっており、不安の質が変わっていて、多様化していることが分かった。正規と非正規で不安に関する最も出現回数が多かったワードは「仕事」であっても中身は違う。従来、考えられた雇用形態による不安の有無とは異なる結果であった。永瀬(2003)によると、従来、日本の女性は結婚前に典型労働者の職について、結婚を境に離職し、子どもが13歳以上になると、非典型労働者として戻ってくる傾向であった(雇用者の6割)。非典型労働者はワークライフバランスを重視するため自ら非典型労働者として働くことを選択する女性も多いと考えられていた。しかし、本調査を分析した結果、従来の特徴とは違った不安要素が検出された。正規職女性はワークライフバランスについて、非正規職女性は雇用の安定について、無業の女性はネットワークから孤立していることについて、幕然とした不安を感じていることが分かった。

献辞

本稿の執筆にあたり、大沢真知子先生（日本女子大学）にご指導いただき、本間道子先生（日本女子大学名誉教授）、松崎友世先生（大東文化大学）に分析に関わっていただくとともに、有益なコメントをいただきました。また、住友生命保険相互会社「未来を強くする子育てプロジェクト」研究助成金により、研究環境を整えることができました。ここに記して感謝申し上げます。

[文献]

- 江頭説子（2009）「キャリアについて主体的に考える—職業キャリアからライフキャリアへ」矢澤澄子・岡村清子（編著）『女性とキャリア』勁草書房 51
- 江原由美子（2015）「見えにくい女性の貧困」小杉礼子・宮本みち子（編著）『下層化する女性たち』勁草書房 45-72
- 伊藤美奈子（2000）「中年期女性の個人志向性・社会志向性の発達に関与する要因：年齢、ライフスタイル、理想と現実のずれに注目して」『お茶の水女子大学ジェンダー研究』3：131-147
- ギンカ・トーゲル（2016）『女性が管理職になったら読む本—「キャリア」と「自分らしさ」を両立させる方法』日本経済新聞出版社 167
- 樋口耕一（2004）「テキスト型データの計量的分析：2つのアプローチの峻別と統合」『理論と方法』19(1)：101-115
- 樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版
- 稲垣精一・小塩隆士（2013）「初職の違いがその後の人生に及ぼす影響— LOSEF 個票データを用いた分析—」『経済研究』64（4）：289-302
- 金森久雄・荒憲治郎・森口親司（2013）『経済辞典（第5版）』有斐閣 577
- 小杉礼子・鈴木晶子・野依智子・横浜男女共同参画推進協会（2017）『シングル女性の貧困—非正規職女性の仕事・暮らしと社会的支援』明石書店
- 前田正子（2017）『大卒無業女性の憂鬱』新泉社
- 見田完介・栗原彬・田中義久（1988）『社会学事典』弘文堂 752
- 永瀬伸子（2003）「第7章日本の非典型労働：女性のライフサイクルと就業選択」大沢真知子・スーザン・ハウスマン（編著）『働き方の未来—非典型労働の日米欧比較—』日本労働研究機構 263-299
- 仲田周子（2012）「社会経済状況と女性のキャリア」『現代女性とキャリア』4：124-136
- 仲田周子（2013）「氷河期世代」における「不安」の中身—「女性とキャリアに関する調査」の自由記述の分析から—」『「女性とキャリアに関する調査」結果報告書』203-210
- 内閣府（2017）『男女共同参画白書平成29年版』
http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h29/zentai/html/honpen/b1_s02_01.html（2017.10.12 参照）
- 大槻奈巳（2015）『職務格差—女性の活躍推進を阻む要因はなにか』勁草書房
- 齋藤朗宏（2012）「日本におけるテキストマイニングの応用」『The Society for Economic Studies The University of Kitakyushu Working Paper Series』2011-12
http://www.kitakyu-u.ac.jp/economy/study/pdf/2011/2011_11.pdf（2018.02.09 参照）
- 下中弘（1981）『新版心理学事典』平凡社 740
- Shirahase, S., (2000). Women's Increased Higher Education and the Declining Fertility Rate in Japan, *Review of Population and Social Policy*, 9 : 47-63.
- 周 燕飛（2015）「専業主婦世帯の貧困：その実態と要因」経済産業研究所 1-22
<https://www.rieti.go.jp/jp/publications/dp/15j034.pdf>（2017.05.15 参照）
- 総務省（2017）『平成29年版情報通信白書』
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc141110.html>（2018.02.17）
- 総務省（2017）『労働力調査』

<http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/nen/ft/pdf/index1.pdf> (2018.02.18)

総務省 (2015) 『平成27年国勢調査』

<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka.htm> (2017.02.11)

山田昌弘 (2015) 「女性労働の家族依存モデルの限界」小杉礼子・宮本みち子 (編著) 『下層化する女性たち』勁草書房 23-44

[註]

- 1 伊藤美奈子 (2000), p.144 参考に定義。
- 2 年齢別にみると2011年では40～49歳が最も高く77.0%, 2012年では50～59歳が最も高く76.7%であった。年齢層が高くなるほど不安を感じる割合も高い (『国民生活に関する世論調査』2011, 2012)。
- 3 仕事は生活や人生全般とつながっている活動や、個人が組織や社会と関わるための働きといった社会的な役割を持つ意味において用いられる場合が多い (江頭, 2009)。本稿では「仕事」を「社会的要因」とみる。
- 4 日本の労働市場において、新規学卒者に対する求人が低調となった時期を、気候が寒冷化した時代である氷河期になぞらえた言葉。企業の新卒採用数が急激に減少した1992年に登場した造語で、とくに学生の就職難を表現する用語として定着した (『経済辞典』2013, p.577)。この人達は、就職活動時期に企業が採用を大幅に絞ったため、内定が得られずに仕方なくアルバイトや派遣などの非正規社員になった人も多い (2017.4.12. 読売新聞 下田祐介 日本総合研究所調査部副主任研究員)。
- 5 仲田 (2013) は、氷河期世代の特徴をライフコース・パターン、婚姻状況、家庭の経済状況、将来展望で確認し、問題の見取り図を示してはいるが、不安の構造を明らかにするためにはさらに分析を進める必要があった。
- 6 内容分析 (content analysis) とは、文章・音声・映像などさまざまな質的データを分析するための方法であり、社会調査データの分析に適した方法である (樋口2014)。
- 7 調査対象者の就業形態の偏りを避けるために『労働力調査 (平成22年)』に基づいた就業形態の割り付けを行なった。
- 8 分析方法は様々なソフトウェアが開発され、その手方も値段も様々である (KH Coder, MLTP, TinyMiner, IBM SPSS Text Analytics for Surveys)。今回はフリー・ソフトウェア KH Coder (樋口, 2001 公開) を用いる。
- 9 「悩みや不安を感じている」の全体の割合は67.1% (2011年6月実施), 69.1% (2012年6月実施) である。東京都区部の割合は69.5% (2011年6月実施), 75.7% (2012年6月実施) であった。
- 10 本研究では「現在までのあなたの働き方についてあてはまるものを1つ選んでください。(Q1)」の設問を設け、就労パターンを5つに分けた。
Ⅰ 初職継続型 (学校卒業後、最初に就いた仕事を現在も継続している)
Ⅱ 転職型 (現在仕事に就いているが、これまでに1年未満の離職期間があった (転職経験あり))
Ⅲ 再就職型 (現在仕事に就いているが、これまでに1年以上の離職期間があった (再就職経験あり))
Ⅳ 離職型 (現在仕事に就いていないが、かつては仕事に就いていた)
Ⅴ 就業経験なし (学校卒業後一度も仕事に就いたことがない)
- 11 本稿では、Riwac 調査 (2011) の結果をもとに、調査対象者の中29～34歳 (1282人) を氷河期世代とした。これは、大槻 (2016) の氷河期世代特徴を参考にしたものである。この29～34歳の調査対象者が大学を卒業したと推定される2000年度から2005年度の大卒女性の就職率は60%前後であった (仲田, 2012)。また、バブル経済最中から就職氷河期に入る前の1988年度から1992年度に就職活動をしたと推定できる42～46歳 (1028人) を氷河期前世代とした。
- 12 経済的ゆとりについては、「Q6 現在のご家庭の経済状態についてどのように感じていますか。あなたの実感にもっとも近いものを1つ選んでください。」と問いについて、1「ゆとりがある」、2「ゆとりはあるが、将来的な不安はある」、3「ゆとりはないが、今すぐ生活に困るようなことはない」4「家計が厳しい状態である」5「わからない」の選択肢であった。

- 13 将来展望の面は「Q65 あなたは自分の将来について、どのような展望をもっていますか。あなたの考えにもっとも近いものを1つ選んでください。」と問いに対し、1「今よりもっと豊かな生活ができる」、2「現在の生活レベルは維持できる」、3「経済的に厳しくなる」、4「将来展望が見えない」、5「その他」の選択肢であった。

13 Table7 抽出語に対する出現回数（全体及び正規・非正規・無業別）

不安要素を有する All(n=4195)		正規(n=1325)		非正規(n=1311)		無業(n=1371)	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
仕事	2137	仕事	481	仕事	503	子ども	723
子ども	1399	職場	311	子ども	352	仕事	564
将来	910	将来	302	正規	331	働く	492
自分自身	835	現在	295	現在	308	自分自身	341
現在	825	子ども	271	将来	304	将来	259
働く	713	生活	243	働く	250	就職	227
生活	681	収入	237	自分自身	245	パートナー	216
収入	675	自分自身	220	収入	237	子育て	214
職場	642	働く	200	生活	209	預け先	207
正規	595	年金	173	年齢	178	生活	206
年齢	463	出産	168	職場	154	現在	190
年金	462	結婚	141	社員	150	正規	184
子育て	460	子育て	141	年金	146	職場	169
パートナー	456	経済	134	パートナー	142	収入	162
心配	413	心配	133	心配	122	年齢	159
就職	410	老後	118	経済	120	バランス	141
出産	405	年齢	115	老後	113	心配	141
経済	402	バランス	114	就職	112	年金	125
預け先	327	女性	96	出産	109	経済	122
バランス	320	パートナー	83	教育	92	教育	121
老後	320	転職	81	子育て	91	家庭	119
結婚	274	辞める	73	結婚	85	出産	113
教育	253	社会	73	お金	80	社会	112
時間	253	親	73	貯金	78	時間	110
家庭	251	家庭	66	転職	73	お金	108
社会	250			時間	67	家事	91
お金	249					難しい	82
社員	222					老後	74
女性	200					病気	68

14 Table 抽出語に対する出現回数（氷河期世代・氷河期前世代におけるキャリアパターン別）

不安要素を有する氷河期世代 (n=1068)					不安要素を有する氷河期前世代 (n=830)										
All (n=1068)		正規(n=381)		非正規(n=289)		All (n=830)		正規(n=216)		非正規(n=312)		無業(n=245)			
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数		
仕事	602	仕事	203	仕事	149	子ども	247	仕事	386	仕事	71	仕事	148	仕事	136
子ども	443	子ども	100	子ども	86	仕事	212	子ども	252	将来	59	子ども	93	子ども	112
自分自身	223	将来	86	将来	69	働く	113	将来	191	現在	54	正規	62	自分自身	71
将来	223	職場	93	現在	68	自分自身	93	自分自身	164	職場	51	将来	60	将来	58
現在	209	現在	78	正規	65	子育て	86	現在	159	生活	50	現在	58	生活	48
働く	205	出産	66	自分自身	62	預け先	84	生活	148	年金	44	収入	52	働く	47
子育て	183	子育て	65	出産	54	パートナー	65	年金	121	収入	36	自分自身	51	年齢	40
出産	171	収入	63	生活	50	就職	63	収入	120	年齢	34	教育	41	現在	38
職場	168	自分自身	61	収入	47	正規	61	年齢	116	自分自身	32	生活	40	就職	38
生活	160	生活	54	働く	46	将来	56	働く	113	働く	32	年齢	38	パートナー	37
収入	157	バランス	48	結婚	39	生活	52	正規	107	老後	32	老後	37	年金	37
正規	153	女性	48	社員	34	現在	51	職場	100	子ども	29	年金	34	心配	33
預け先	142	働く	44	職場	34	職場	49	老後	95	心配	26	パートナー	32	教育	25
バランス	115	結婚	39	心配	33	バランス	47	心配	93	定年退職	20	経済	32	家庭	23
パートナー	115	経済	38	経済	30	出産	43	パートナー	84	正規	19	働く	31	社会	23
就職	112	年金	34	子育て	29	家庭	42	教育	82	社会	18	心配	27	職場	23
心配	104	心配	33	年齢	28	時間	41	経済	77	介護	17	お金	25	経済	21
経済	100	辞める	31	就職	26	収入	37	就職	73	経済	17	職場	25	時間	21
結婚	94	預け先	28	預け先	25	心配	37	お金	56	親	17	就職	23	子育て	20
時間	87	パートナー	27	年金	21	お金	33	社会	53	体力	14	社員	21	収入	20
年齢	84	年齢	27	社会	20	社会	33	親	53	お金	12	親	17	老後	20
社会	80	時間	26	年齢	20	年齢	26	介護	49	結婚	12	転職	17	正規	19
家庭	79	老後	26	お金	18	教育	25	家庭	47	病気	12	難しい	17	お金	18
女性	79	社会	25	パートナー	18	経済	25	子育て	45	就職	11	安定	16	バランス	14
年金	73	転職	24	老後	18	家事	24	時間	44	人間	11	時間	15	親	14
お金	62	難しい	23	バランス	16	難しい	23			必要	11			家事	13
難しい	61	家庭	21	転職	16	病気	23							介護	13
社員	57	就職	20	家庭	15	復帰	20							体力	13
家事	53	復帰	20			親	18								
復帰	53	正規	19			人間	18								
		問題	19												

